
エンルーシュ大陸戦記

kazuma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンルーシユ大陸戦記

【Nコード】

N9170S

【作者名】

kazuma

【あらすじ】

この世界とは違う世界にある大陸、エンルーシユ。

古代エンルーシユ国は謎の崩壊をとげ、今ではいくつもの国家に分かれる時代になっていた。

帝国貴族の一門である主人公、アルトリウス。

彼の視線を通してエンルーシユ大陸史の一部を追っていく（予定）

第一話 「はじまり」

馬蹄と車輪の音が、森の中に響き渡る。

十数台の荷馬車が道を疾駆し、それを馬に乗った男達が追っていた。騎馬の男達の数は百数十人、盗賊である。

男達の顔に歓喜の表情が浮かぶ。荷馬車を御す者達のみなりや事前に入手した情報から、荷馬車の中身を知っていたのだ。

この荷をすべて奪い、荷物は売りさばき、御者は人質として身代金をとればかなりのもつけが出る。今晚飲む事のできるであろう美酒の味を思い浮かべ、そして御者達の恐怖に凍る顔を見て感じる残酷な喜びが彼らの表情を作り出していた。

やがて一団は森を抜け、草原に出た。

ここで囲みこめば一気に、そして簡単に勝負はつく。

歓喜の絶頂に達しそうになっていた彼らの表情は、次の瞬間には驚きに変わっていた。

御者達が商人とは思えない俊敏さで馬に飛び移り、馬と荷車を切り離れたのだ。

一瞬で馬上の人となった二十数騎が剣を抜き、一塊になって盗賊の包囲から抜け出した。

呆気に取られた彼らであるが、残された荷車に近づいてさらに驚かされる。

価値ある品物で満載といわれていた荷馬車の中には枯れ草が敷き詰められ、外側にだけ高価に見える布地がそれを包み込むように置かれていた。

これは、罠だ！！

盗賊たちがそう気づくと同時に、彼らの周囲は重武装の兵士に取り

囲まれた。

「お前達は包囲された、抵抗などせず、降伏しろ。われわれは東方
辺境侯の軍である。」

兵士達の向こう側から、声がする。

今降伏したところで、所詮盗賊に待つのは刑死だけだ。

そう思う盗賊たちは迷うことなく馬に飛び乗り、包囲から抜け出そ
うと駆け出した。

しかし、それを見透かしたかのように歩兵達が大声をあげ、槍を突
き出す。

馬というのは、元来臆病な動物だ。ウサギが飛び出しただけで驚い
てしまう。大声と兵士達の出す騒音、そして突き出される槍、馬が
狂奔するのも当然であった。

棹立ちになった馬から振り落とされた者たちは槍で押さえつけられ
た。幸運にも振り落とされなかった十数騎が包囲を切り抜け、先ほ
どの森を目指して駆ける。

歩兵からならば逃げられる、森に入れば隠れる場所も、裏道も知り
尽くしているのだから逃げ切れる。安堵しかけた彼らに、風のように
に現れた騎兵団、先ほど逃げ去った騎兵達が槍を持ってぶつかつた。
瞬く間に、ほとんどの盗賊が叩き伏せられた。

ただ一人馬に乗ったまま残された男、盗賊の長と思しき男がそれ
も逃げようとするが、彼の前に一騎が立ちふさがる。

走らせた馬の勢いをそのままに、男が騎士に手に持った槍を突き出
す。

勝負、は一瞬で決まった。

槍の穂先が騎士に吸い込まれるのを確認したと思った男は不思議に
思う。

何人も突き殺してきたが、その手応えがない。槍の穂先は見えない
のだから突き刺さっているはずだ。

その次の時には、彼の意識は消えていた。

騎士が槍を切り上げて穂先を切り取り、振り上げた剣で男を両断していたのだ。

死んだ主を乗せたまま、馬だけが走り去っていった。

「歩兵の指揮、よくやってくれたな。」

盗賊の長を両断した騎士が歩兵にまぎれた男に話しかける。

「ありがたきお言葉。アルトリウス様こそ、騎兵の指揮といい、剣腕といい、相変わらずの見事なお手並みにございます。」

「つまらん世辞をいうなよ、お前は勝つとわかっていただろう？」

アルトリウスと呼ばれた男がふてくされたように応える。

「アルトリウス様に一騎打ちで勝てるのは兄君とお父上、他に帝国内では数人の豪傑方くらいのもんです。」

さも当然といったように騎士がいう。

「もう一人忘れてる。テイトウス、お前だよ。」

そういつて笑うと、アルトリウスはテイトウスの方を叩き、兵士達の方に歩いていく。

「それと、帝国本土での俺はアルトウスだよ。理由は、くだらないがね。」

苦笑してアルトリウスはいう。

アルトリウスという名は、帝国語的ではなかった。

実際、エルフの伝承に登場する英雄の名前であるが東方辺境侯領では何の問題もなかった。

東方辺境侯家はエルフが開祖と言われる上に、東方辺境侯領には多くのエルフや、エルフとの混血者も住んでいるからだ。

だが、帝国直轄領の、しかも貴族内では話が違う。ヒューマンの純血の強い宮廷内では、エルフと思われる事はあまり好ましくないのだ。

父や兄の考えもあって、アルトリウスは帝国語風にアルトウスと名乗っている。

いつもは帝国語で呼ばれることの多いアルトリウスだが、昔なじみであり、エルフであるティトウスは本名で呼んでくれる。それが、彼にはなぜか嬉しかった。

・帝国、諸侯領の中心都市にて・

「これはこれはアルトウースさま、実にお早いおつきですな。

流石は帝国の剣とも呼ばれる東方辺境侯のご子息、始祖の再来とも呼ばれるだけあって、お見事でございます。」

でっぷりと太った貴族がもみ手をしながらアルトリウスの一団を迎える。

「諸侯領の治安を守るのが辺境侯軍の役目でございますゆえ。

しかも、帝都付近の諸侯領とあればすぐに退治するのが当然でございます。」

にこりと微笑を浮かべ、アルトリウスが応える。

帝国軍には皇帝直属の禁軍とは別に、辺境侯軍が存在する。

辺境侯軍は文字通り諸侯の中でも4人の辺境侯にのみ編成が許されている。

国境に位置するがゆえの特別措置である。

だが、これをただ放置すれば軍閥を生む事になる。

それを恐れた宮廷は辺境侯にある義務を与えた。

軍隊をもてない諸侯領、それと帝都付近の軍事的治安維持である。

各辺境侯は「派遣將校」という名目で一族の者を人質として直属軍に送るよう要請される。

派遣將校は禁軍の一隊を任せられ、治安維持の任務に当たる。

彼らに死んでほしくない辺境侯家は、そこにさらに辺境侯軍を付けるため、兵糧や兵士の派遣にかかる費用は馬鹿にならない。

このようにして辺境侯の力をすこしでも殺ぐことが目的の第一、そ

して帝都での暮らしやパーティーになれた派遣将校は気が付けば親帝国本土派になる。というのが目的の第二なのだ。といった具合である。

今、アルトリウスが派遣されているのも帝都付近の治安維持の為にあった。

彼の場合、マジメに任務をこなせばこなすほど、嫌気がさすものがあるが…

「さて、捕らえた賊どもを引き渡していただきましょうか。兵士の皆様には宴席をご用意させていただきました。」
「ここにこしなから貴族が言う。」

「彼奴らは私の、帝国の財産を奪った大罪人、当然でしょう？」
「続けていう貴族の言葉に対して、馬鹿なことを…アルトリウスは思う。」

今頃、彼の秘密の私兵が盗賊どもの本拠に乗り込み、財宝を奪いに行っていることだろう。

そもそも、その財宝も彼が民からちよるまかしたもののなのだ。賊たちも、引き渡せば彼自身のの私的な奴隷にされるだろう。

この貴族の所業は、でっぷりと太った醜い姿を見れば一目で分かる。

「残念ながら、それは出来かねますな。賊とはいえもとをただせば陛下の民、それを無断で引き渡すなど、陛下の忠実な臣である私にはできぬことであります。」

アルトリウスは答える。

「しかしアルトウス様…これは我ら諸侯との長い付き合いのなかで生まれたことにございます。それと、少しではありますが、御礼です…」

貴族は袖の中にそっと袋を入れようとする。

その手を押さえ、アルトリウスは言う。

「私に、私欲のために不忠をなせと？これ以上のお言葉は聞き逃がせませぬな。」

小声ではあったが、アルトリウスから発せられる気配は尋常ではなかった。

その気配に気圧され、貴族は押し黙る。

「それと、我らに祝宴は無用、すぐに帰営いたしますゆえ。」

それだけ言つと、アルトリウスはきびすを返し、出立した。

「それにしても、生意気な奴だ。東方のエルフもどきめ。

ま、おかげで祝宴の費用がなくなつたわい。

奴隷どもを手に入れることはできなかつたが、お宝が手に入ればよいわ」

にやにやと笑いながら、盗賊たちの本拠地を知らされた貴族が馬に揺られて行く。

既に手下が本拠地で見張りをしている。これで無用の邪魔は入らないはずだ。

「な、なんじゃこりゃああああ！！！」

本拠に着いた貴族は叫び声を上げた。

見張りの手下は気絶させられ、縛りあげられ、財宝も運ぶのに価値不相応な手のかかるもの以外はすべて持ち去られている。

「辺境侯の妾腹ふぜいがああああああ！」

顔を真っ赤にした貴族が怒鳴るが、どうにもならない。

アルトリウスが犯人であるという証拠はどこにもないのだ。

「はっはっは、あいつが悔しがっているのが目に浮かぶよ」
財宝を荷車に載せ、馬に乗ったアルトリウスが笑つ。

彼が貴族と掛け合っている間、ティトウスが指揮する辺境侯軍の一隊が捕虜にした盗賊に案内させ、本拠地に乗り込んでいたのだ。

貴族の手下を物陰に潜んだ兵士達が瞬時に倒し、縛り上げるとあとは悠々と運びやすいお宝を頂いて帰ってきたのだった。

「アルトリウス様、捕虜達は兄上様にお引渡しすれば？」
ティトウスがたずねる。

「それはそうだろう、あの兄上の事だ、上手い事運んでくれるに違いないよ。」

アルトリウスは迷うことなくいう。

帝国軍の軍人であると同時に、宮廷の住人である兄を、アルトリウスはこの上なく信頼していた。

「しかし、腐っているな。貴族とやらは…」

「アルトリウス様…」

誰かに聞こえる、目がそうつっていた。

「気にするな、エルフ語で話せば分かる奴はいない。」
エルフ語でいう。

「では、貴方が変わると？ 皇帝にでもなるおつもりですか？」

笑いながらティトウスが言った、もちろん冗談である。

「俺に皇帝なんて、似合わないよ。願わくば、真に皇帝たる人に仕えたいものだな。」

背中を伸ばしながら、アルトリウスが言う。

「今の陛下も十分に英明な方だ、しかし、腐った貴族どもを一掃するには何か足りない…」

ある意味では、今の皇帝を否定する言葉でもあった。

「私は、アルトリウス様にお仕えするのみです。」

どうあってもアルトリウスについていく、ティトウスの目はそうつっていた。

「ありがとう、ティトウス。これからも頼りにしているよ。」

いつものように、しかし照れながらアルトリウスがティトウスの肩を叩いた。

隊伍をしっかりと組み、しかし意気軒昂に進む彼らの先に、帝都がそびえていた。

帝都に戻り、野営地で皆と飲む酒と料理は貴族が用意した祝宴よりも楽しかろう。

そう思いながら彼らは帰途を辿るのだった。

第一話 「はじまり」(後書き)

なんとか、書き上げてみました。
よろしければ批評願います。

mixiもやっておりますので是非足をお運びください。

加筆、5月4日

第二話 「次世代の産声」

兵士達の、歓呼の声が上がる。

帝都付近に位置する帝国軍軍営に到着したアルトリウスと、彼の一隊を迎えるほかの兵士の声だった。

派遣将校とはいえ、勝利して帰還した指揮官への賞賛の声は変わる事はない。

兵士達は、彼らの指揮官が有能か、そうでないかに敏感である。自分の生死がかかっているからだ。

そんな彼らの賞賛を浴びるアルトリウスだけでなく、彼の部下達も誇らしい気分で一杯だった。

「東方辺境侯軍派遣将校、アルトウスⅡフォンⅡクラウディウス、盗賊討伐の任を終え、ただ今帰還いたしました。」

軍営の広場の舞台上で、戦勝と帰還の報告をする。一種の儀式である。

報告を受けるのは帝国軍の官僚。盗賊討伐のような小さな任務ならばそのようなものである。

「此度の任務、大儀である。貴殿の戦勝に陛下も大変喜んでおられる。なにか、望むものはあるか？」

儀礼通りの台詞を官僚が言う。

褒美を望んだところで、結局は途中で握りつぶされる。運が悪ければ軍の官僚から睨まれる。アルトリウスにはそれが分かっていた。

「陛下からのお褒めのお言葉だけで、臣には身に余る光栄でありませぬ。ただただ、陛下のご厚情に感謝するのみでございます。」

無欲で帝国に忠実な指揮官、宮廷内で生きるにはその人物像が一番無難である。そう思う。

「貴殿の陛下への忠誠、しかと確認した。今後とも帝国の安寧のため、励まれよ。」

それだけというと、官僚は引き上げていった。東方辺境侯末子の派遣
将校に興味はないらしい。

演台から降り、兵士達の中心まで歩いていったアルトリウスは、
先ほどまでの厳粛な顔つきから表情を変え、叫んだ。

「みんなご苦労だった。さあ、勝利の宴を始めよう！」

兵士達は声をあげ、自分達の軍営へと戻っていく。宴の準備のため
だった。

- 東方辺境侯軍軍営 -

軍営は、兵士達の騒ぎ声で沸き立っていた。

作戦に参加した兵士以外にも他の東方辺境侯軍の兵士達も、近くに
軍営を置く軍の兵士達もいる。

我らは一つの家族である、そんな雰囲気は漂っていた。

「やはりアルトリウス様は大殿の秘蔵っこ、あの剣の腕には鳥肌が
立ったよ」

兵士の一人が言う。名前の言い方から、東方辺境侯軍の兵士らしい。
「剣の腕だけでなく作戦の指揮も見事だ、直属軍に来てくれない
かなあ」

と、今度は直属軍の兵士らしい。

「そういえば、作戦の指揮といえば兄君はさらにすごいらしいぞ、
父君をさらに超えるということだ。」

今度はまた別の兵が言う。

「そうなのか？軍の上の方にいる人だから書類仕事一辺倒なのかと
思ってたよ。」

「お前が軍に志願したのは最近だから知らんのだろうな。それに、
最近は大きな戦争も無かったし。」

若い兵士をベテラン兵がたしなめる。

なんにしても、兵士達から向けられる辺境侯家の一族の信頼は多大

なもののようにだ。

大騒ぎをしている兵士達を尻目に、宴の主役は兵士達と一通り話をすると彼らの輪から外れた。

「テイトウス、あとは頼むよ。」

それだけを腹心に言い残し、帝都の帝国軍大本営へと向かうのだ。会わねばならない、人がいた。

- 帝都、帝国軍大本営 -

軍靴が鳴らす音が、廊下に規則正しく響き渡る。

執務室の前まで来ると、一度立ち止まり、大きく深呼吸をする。会って緊張しなければならぬ相手ではない。だが気を抜くと、圧倒されるのだ。そういう人だった。

呼吸を整え、ドアのノッカーを叩く。

「東方辺境侯軍派遣将校、アルトウスⅡフォンⅡクラウディウス、入ります。」

「アルトリウスか、待っていたよ。入りな。」

気さくそうな男の声が聞こえる。

アルトリウスはドアを開け、中に入る。

頑丈そうな大きな机に座る男が視界に入る。執務室の主でもある兄、ジークフリートだ。

辺境貴族の一門であるにも関わらず、帝国軍の中枢にて栄達の途上にいる。

「お前の戦功は聞いたよ、お疲れさん。」

何かを書きながら、きさくそうな口調で、兄が話す。いつもの兄の口調だ。

「一撃で賊将を斬ったんだって？」

「とるに足らない敵でありましたので。」

「ふうん、で、損害と戦利品は？」

「禁軍の歩兵が数人怪我をしました。戦死者はいません。戦利品は金品と馬と捕虜です。本営にてすべて引き渡しましたが…。」
アルトリウスはそこまでいい、口ごもった。

「その続きを言いたくて、ここまで来たんだろう？言いなよ。」
「捕虜に過酷な罰を与えませぬように。道々での様子を見ると、もとは領内の良民であつたようです。」

「ふむ…」
少し考える様子をみせてペンを止め、兄の視線がアルトリウスから外れる。

数瞬の後、何かを考え付いたかのように、また視線をあわせて言った。

「わかった、しかしやり方は私に任せろ。よかろう？」

「はい。」

「うむ、で、用はそれだけかな？」

「と、いいいますと？」

「褒美の希望は他にないのか、という意味だが…」

「特には…そうだ、兵士達に褒章を与えてください。よく頑張ってくれました。」

アルトリウスの言葉を聞き、やれやれ、とでも言いたげにジークフリートは手を上げる。

「無欲な奴だよ、全く。つまらんなあ。」

「ならば…」

「なんだ？」

話を聞こうと、ジークフリートは身を乗り出した。

「私は戦闘といえば賊徒の討伐しかしておりません。正式な初陣を飾りたく思っております…」

この願いばかりはかなえられまい、そんな願いだった。

帝国の仮想敵国は目下のところ共和国か王国である。だが共和国は西方侯、王国は北方侯の管轄だ、

兄であっても気安くは戦闘を許可する事はできない。そう思ってい

た。

だが、兄の返答は予想を超えていた。

「お安い御用だ。というよりも、願ったりかなったりだな。」

子供がお使いを頼まれたかのように、気軽に返事をした。

きつと、兄の思惑にまんまとはめられたのだろう。そんな気がした。いつも気がつくと自分の思い通りにしている。兄の一番怖いと思えるところだった。

「ちょうど先刻、西方侯から伝令が届いてな、毎度のアレらしい。」
そういつて一枚の白い札をちらつかせる。

アレ、というのは共和国の執政官選挙のことである。

共和国の第一人者である執政官を選出する執政官選挙は数年に一度行われる。

そのたびに、共和国は王国か、帝国に対して出兵を繰り返している。選挙の前に戦争に勝てば、支持率は上がり選挙も安泰である。という理屈らしい。

ゆえに、そのときの執政官の支持率が悪ければ大きな勝利を挙げなければいけないし、

逆に、十分な支持を得られているのならば、戦争も無理にしないでいいのである。

ちなみに、現在の共和国の執政官は十数年連続で勤め上げている。

ありていに言えば、飽きられていて、支持率は良くない。

つまりは、

「今度の出兵は、かなり大規模だろうな。」

という事らしい。

自分達の為政者を自分で決める。それは共和国の魅力であるらしいが、それはそれで難儀なものである。

「我々としては、今度は西方侯領に禁軍からも援軍を送るつもりだ。」
「そういつて、ジークフリートはひとさし指を立てる。注意して聞け、という合図だ。」

「だが大軍であればあるほど編成に時間がかかるものだ。だから、時間稼ぎの必要がある。」

立てた指をそのままアルトリウスに向け、続ける。

「お前に、帝都にいる東方侯軍の騎兵二千騎を預ける。それを率いて西方侯軍と既に派遣してある禁軍と合流し、共和国軍を足止めしろ。できれば撃退も視野に入れておけ。」

そこまでを一気にいい、一息ついてさらに続けた。

「まあ、俺か親父が出張ればそれで十分なんだがな、俺は援軍の編成と補給のの準備で忙しいし、親父は本国から離れるわけにはいかないからな。お前の初陣になってちょうどいいよ。」

そっぴいながら先ほどまで机の上にあつた紙をくしゃくしゃにまらめて捨て、新しい紙にペンを走らせる。

「この戦いで総指揮を執るのはネーベルスタン將軍だ。覚えてるか？」

ヴェルンハルト「フォン」ネーベルスタン、禁軍の將軍である。

帝国下級貴族出身ではあるが、軍のたたき上げとして今の地位にいる。

十数年前の戦争では東方边境侯の指揮下でその力を発揮する。

戦争後も边境侯に心酔し、禁軍に派遣されたジークフリート、アルトリウス兄弟の禁軍における後見役のような役割を果たしている。

「あの人ならば、お前を無下に扱う事もしないだろう。力を尽くせよ。」

言い終わると同時にペンが音を止める。何かを書き終えたらしい。

「お前にコレを渡しておく、將軍への伝言だ。」
きつと、紹介状かなにかだろう。そういう配慮は怠らないが気持ちも匂わせない、兄らしい。アルトリウスは思う。
「今日はお前の部下どもも浮かれて出立はできまい。明日中に部隊を編成し、出立しろ。」
立ち上がり、扉を指差す。
「わかつたらすぐに行け。俺は忙しい。」
「了解いたしました。」
一方的な言い方であるがなぜか腹が立たない。不思議な人である。まあいいか、自分の希望はほぼすべてかなったのだから。
アルトリウスは部屋を出て、東方辺境侯軍の軍営へと急いだ。やることは、山ほどあるのだ。

・ 皇帝の謁見室 ・

アルトリウスと話して数時間もしないうちに、ジークフリートは皇帝に謁見していた。

要件は、先ほど弟から頼まれた事だった。

「陛下におかれましてはご機嫌麗しく…」

そこまでというと、皇帝が手を伸ばす。

「ジーク、つまらない挨拶はいい。奏上文を見せよ。」

ひざまずいたまま奏上文を掲げ、皇帝の近侍に渡す。

皇帝は紙を広げ、一気に読み、ペンを走らせる。

「捕虜をギユスターヴのもとに…とな？」

皇帝の目が光る。

「は、奏上文に挙げた捕虜どもは盗賊とはいえ陛下の良民。今は土地をなくしてはおりますが元は農民であつたようです。是非、ギユスターヴ様のいらっしゃる荘園に派遣することを許可ねがいます。」
それを聞いた皇帝の顔が真っ赤になる。

「き、貴様、よりもよつて廃太子となつた者にまだ情けをかけよ

「というか！さがれ！」
奏上文を投げ返され、ジークフリートはすごすごと謁見室から出て行くのだった。

「やれやれ、皇帝ともなると大変なものだな。」
執務室に戻ったジークフリートはにやりと笑い、奏上文を確認する。奏上文の末尾には、ルドルフ10世、皇帝のサインがされていた。つまりは、許可である。

弟、アルトリウスは前線で、兄ジークフリートは後方で、クラウディウス兄弟の戦いが、始まる。

第三話「既視感」

黒の支配する闇の中で、炎が燃えてあたりを照らしている。

視界に映る空間も例外ではない。だが、目の前には何かがいた。炎によって黒い影が浮かび上がり、数対の目が存在を誇示するかのように炎の出す光を反射する。獣だろうか、いや、獣にしては目の位置が高すぎる。

ただ、無性に恐かった。悪寒が全身に走る。それらを振り切るために、少年は叫んでいた。

闇の中を何かが走り、いくつかの影を吹き飛ばす。さらに叫ぼうとする瞬間、光る何かが自分に向かって迫っていた。それまでの悪寒以上の不快感が湧き上がる。何かが自分に突き刺さるうとしている。少年はそう感じていた。ぎゅっと目を瞑る。しかし、一向に痛みを感じない。むしろ、悪寒がなくなり、暖かい。誰かの腕に、抱かれていた。

「また、あの夢か…」

そう呟いて、アルトリウスは目を覚ました。時々、見る夢だった。同じ夢を見るのだから何か心当たりがあるはずだが、全くない。不思議な夢だった。

だが、今はそんな事を考えている余裕はない。すぐに身支度を整える。

しばらく着替えをしながらも、夢が頭から離れなかった。

「アルトリウス様、入ります。」

ノックし、ドアを開けてティトウスが入ってくる。

「半刻後、出立です。準備は・・・まだのようですね。」

「俺の馬上具足が着難いのはお前も知っているだろう？手伝ってく

れ。」
そういわれると、テイトウスが具足を持ち、着せる。
いつもの、慣れた習慣のようなものだった。
テイトウスがいてくれるからだろうか、夢の事は、少しずつ薄れて
いった。

「東方侯近衛軍、進発！」

アルトリウスの声が、軍営に響く。二千騎の騎兵軍が門を通った。
騎兵のみでの編成だった。これなら西方侯領までは急げば補給部隊
のことを考慮しても5、6日で到着できる。兄から得た情報によれ
ば、共和国軍の主力が西方侯領に到着するのはあと約8日後らしい。
到着しても、しばらくは睨みあうのが戦いの常である。訓練を兼ね
ての行軍にしようと、テイトウスと話をしていた。訓練をしながら
の行軍でも、十分に間に合う。

東方侯の騎兵軍は、百騎ごとに一組で編成されている。それらを十
組、つまり千騎を自分が指揮し、もう千騎をテイトウスに指揮させ
ながらの訓練行軍である。いつもは兄に率いられている兵士達も多
いかった。戦闘までに彼らの心をどれだけ掌握できるのか、それが
アルトリウスに課せられた課題だった。この課題の出来次第で、戦
での働きも決まるだろう。

二千騎が一つにまとまり、錐のような形で進んだかと思うと、ア
ルトリウスの合図一つで二つに分かれ、千騎に分かれる。さらに一
組ずつに分裂し、馬を少し駆けさせたと思うとまた一つに纏まる。
時には反転させ、二つの部隊を交差させて馳せ違ふ。これら一連の
動きを繰り返して、夕方まで進めるところまで進む。夕方になると
野営に適した場所を探し、そこに野営陣地を作りながら並行して斥
候を放った。周囲の様子を知るためである事と、補給部隊に位置を
知らせるためだ。補給部隊は夜になるころには出来上がった野営地
に到着し、休む。普通に考えれば、強行軍である。それにも十分に

耐えている。流石は精鋭と謳われる東方侯の騎馬軍だった。予定よりも早く、4日後の夜には西方侯領の軍営に到着していた。

アルトリウスは既に、騎馬軍と、将校達の力量を把握していた。

・西方侯軍、軍営地・

「アルトリウス、よく来た。」

騎乗したままのアルトリウス騎馬軍の前に、馬に乗った一人の老将が現れる。禁軍の大將であるネーベルスタンだった。数人の供が付いているが、ほぼ単騎で来たようなものだった。

帝国では、皇帝からの勅命が無い限り、禁軍の司令官が戦場での総指揮を執る。その地の辺境侯であっても、指揮下に入る事については例外ではない。ネーベルスタンの將軍としての格からいっても、援軍に来るのが皇帝でもない限りは彼が今回の総指揮を執る事になるだろう。

「ケルヴィンからの手紙はよんだ。今回は、見ているだけでもいいんだぞ？」

ネーベルスタンが微笑を浮かべながら言う。兄からの手紙の中身はやはり紹介文のようだ。

「いえ、叔父上。私は軍人としてここに参りました。なんなりと申し付けてください。」

「ふむ・・・しかし、お前になにかあれば東方侯に申し訳がたたん。それに、お前には総大將の立ち位置も学ぶ必要があるのだし、な。」

「叔父上、お気持ちは嬉しいのですが、私には不要でしょう。東方には父も、兄もいるのです。」

「私は、お前にはもっと大きくなる余地があると思うのだがね。まあいい、初陣なのだからな。」

ネーベルスタンは笑いながら言った。

「明日から存分に働いてもらうが、その前に…」

先ほどまでの笑顔が消え、険しい表情になる。

「西方侯との宴だ。本当ならばそんな事をしているヒマはないし、断りたいが…お前が来てくれて助かったよ。お前の挨拶に同行すると思えば耐えられる。」

しみじみと、吐き出すかのように、ネーベルスタンは言った。

・西方侯領、軍営地・

軍営地は、夜にもかかわらず騒々しかった。騒々しいといっても、緊張している軍のそれではない。

アルトリウスとティトウスは軍営の割り当てを部下の将校たちに任せ、ネーベルスタンとともに西方侯のいるという兵舎に向かった。

兵舎は、華美だった。

「ネーベルスタン將軍、遅いではないか。もう皆おるのだぞ？」

赤ら顔の男が、酒盃を掲げる。西方侯、である。

「ん？なんぞ、何処かで見たとようなのがくつついておるの？だれじゃ、新しい従者か？」

西方侯はにやにやと、薄ら笑いを浮かべている。本当は、知っているのだろう。

「従者とはお戯れを。東方侯のご子息、アルトウース殿です。援軍の先遣隊として、辺境近衛軍を引き連れて参られたのです。」

「西方侯閣下、アルトウース＝フォン＝クラウディウスでございます。お久しゅうございます。」

ネーベルスタンが紹介し、アルトリウスが頭を下げる。丁寧な言葉とは裏腹に、二人の目は一切笑っていない。

「おお、思い出した。東方侯家のエルフもどきだ。」

へらへらしたまま西方侯がいう。アルトリウスに対する罵倒であり、東方侯と同義であるが、面と向かって言えるのは自分の絶対的な優

位を確信してのことだろう。

「父上、失礼でしょう。先祖がえりの妾腹の若造とはいえ、折角援軍にきてくれたのですよ。」

西方侯のそばにすわる青年・・・アルトリウスよりも若そうな男が言う。父上、というからには西方侯の子息なのだろうが、父親の発言に輪をかけて傲慢な台詞だった。

「確かにそうだな。まあ、役に立つかは知らないがな。はっはっは」大笑いしながらひざを叩き、西方侯は杯の酒を飲み干した。

「せいぜい我らの足を引つ張らぬよう、死なぬように戦場のすみにもおれ。陛下にはわしからよいようにお伝えしておくからの」そういつて西方侯が手をひらひらとさせる。出て行けということなのだろう。

こんなところにいるつもりもない。ありがたくその提案を受け入れよう。そう思う。

ネーベルスタンの率いてきた禁軍と、アルトリウスの騎馬軍の軍営は隣接していた。

それはネーベルスタンの計らいであると同時に、西方侯の意向でもあったようである。

西方侯の宴から出てきた彼らは軍営の一室で食事をとることにした。いわば禁軍での歓迎の宴である。

「西方侯め、誰に向かってあのような口をきくのか・・・」顔を真っ赤にさせてネーベルスタン将軍が毒づく。

ネーベルスタンは普通はそのような罵詈雑言をはくような人物ではない。

彼は東方侯に心酔している。彼にとって、東方侯の子息への罵声であつても東方侯本人への罵声でもあるのだ。

「叔父上、落ち着いてくださいよ。西方侯は泥酔していたようですし」

「お前は何故そんなに落ち着いていられるのだ？父上だけでなく、

母上も、兄上もお前も、あのような場であのように罵倒されて、悔しくは無いのか？」

ネーベルスタンの目がアルトリウスに向けられる。

このように率直に、激しく怒ることのできることはネーベルスタンの美質であると父が言っていた事をアルトリウスは思い出していた。「あの侮辱は戦場での武功で撤回させます。武功をもって撤回させる、それこそ東方侯家の男のすることだと私は思います。」

実のところ、当然ではあるがアルトリウスも激怒していた。ただ、幼いころから言われる陰口でもあったせいも、馬鹿馬鹿しい思いもする。が、やはり父や母への罵倒は許せなかった。

「だから叔父上、私は安全なところにいるつもりはありませんよ。安全な隅では武功の建てようがありませんからね。」

にこりと笑いながらアルトリウスがいう。ティトウスは、アルトリウスの怒りの激しさを感じていた。大貴族であると同時にヒューマン中心の宮廷で異彩を放つ容貌や魔力を持ち、孤立しかねないアルトリウスが身に着けた護身術がこの笑顔だった。

「アルトリウス様はどこにいらしても危険ではございません。私も、軍も、貴方をお守りいたします。」

ティトウスの口から、つい、出た言葉だった。「東方侯家は安泰なようだな、アルトリウス。君には忠臣がそばにいてくれる。」

笑ってネーベルスタンが言う。將軍との会話に割り込んだからには叱責を覚悟していたティトウスは驚くだけだった。

「でしょう？叔父上。私は恵まれているのですよ。この上なく大切な友人と上官と部下、それに野営での料理にね。」

アルトリウスはそういつて、料理を口に運んだ。最後につけた一つが彼なりの照れ隠しだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9170s/>

エンルーシュ大陸戦記

2011年11月4日02時05分発行